

漢の礼制から見た金印「漢委奴国王」

志野 敏夫

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2014年9月29日受付、2014年11月6日受理)

はじめに

江戸時代に志賀島で発見された「漢委奴国王」金印は、1954年に国宝に指定されたが、その後もいまままでにさまざまな議論をよんできた。そうした中で、印文の「漢委奴国王」はどのように読むのか、なぜ後漢王朝は蛮夷の小国に破格の金印を賜与したのか、そして、なぜ福岡県の志賀島に金印は埋められていたのか、といった諸点がいまだ十分に解決されていない重要課題であると思われる。

金印は、日本の地から出土し、1世紀中ごろの列島の姿を知る手掛かりとなる、第一級の史料であるために(1)、その関心はやはり日本の古代史への関心が中心であり、そのため議論も日本史の立場からなされることが多い。しかし、この金印は中国後漢王朝が下賜したものであるから、考慮されるべきは漢の事情こそが重要ではないだろうか。そこで、本論では、金印問題は漢の制度、とくに王朝の理念が表出されている礼制から考えるべきであるという視点に立って考えてみたい。大方の御叱正を賜るならば幸いである。

1. 「漢委奴国王」

金印をめぐる議論の中で、最もおおきな関心を集めているのは、印文の「漢委奴国王」という5文字をどのように読むか、であるといっても過言ではないだろう。中学・高校の教科書や金印を所蔵する福岡市博物館の公式Webサイトでは、「漢の倭(ワ)の奴(ナ)の国王」と読んでいて、これが通説となっているが、もちろん反論も多い。議論は音韻学の分野にまでおよび、大谷光男氏がまとめるところによれば、江戸時代以来実に18もの読み方が提出されているという(2)。

「漢の倭(ワ)の奴(ナ)の国王」と読むのは、魏志倭人伝に「奴国」がかなり大きな国として登場すること、さらに、『後漢書』光武帝紀 中元二年条に、

東夷倭国遣使奉献

とあり、同じく『後漢書』東夷列伝に、

倭国奉貢朝賀

という文章があることを大きな根拠としている。しかし、後漢王朝が与えた印という同時代資料に彫られている文字を、後世の文献によって改変してしまつてよいのであろうか(3)。

そもそも漢の印章は、官僚組織内での文書のやり取りにおいて、その文章の信頼性を保障するためにあった。したがって、栗原氏も指摘されるように(4)、『後漢書』馬援列伝に引く『東漢觀記』に、

援上書、臣所仮伏波將軍印、書伏字犬外襍。城皐令印、皐字為白下羊、丞印四下羊、尉印白下人、人下羊、即一県長吏、印文不同、恐天下不正者多。符印所以為信也、所宜齊同。薦曉古文字者、事下大司空正郡国印章。奏可。

とあるように、文字が違っていることはもちろん、「伏」字の「犬」の部分が乱れているということすらもゆるがせにはしてはならないことであった。

それでは、外夷に与える印章はどうであったであろう。外夷の国が漢の印章を受けるということは、漢皇帝を頂点とする秩序に組み込まれることを意味した。この「秩序に組み込まれる」とは、ある特定の身分に序せられるということである。そして、ある者がある身分を占める、ということを経の目にも明らかに示す仕組みが、すなわち礼であった。誰の目にも明らかに判るためには、その者がどのような色、文様、形の服飾を身にまとい印綬を佩くかということを示された。例えば『礼記』哀公問篇に、「孔子曰、丘聞之、民之所由生、礼為大。…有成事、然後治其雕鏤文章黼黻以嗣。」とあるように、これを「文章」と言い、これがはっきりとしていることを「文明」と言ったのである。その規定は材質や寸法にまで及んだのであり、例えば赤綬を賜ったときには、それがよく似た色であるからといって紅色の綬であることはありえないのであって、またそうである

からこそ、われわれは現代において、当該金印が、例えば方一寸であることなどから、漢の時代のものであると確定できたのである。漢代の印綬制を精力的に研究されている阿部幸信氏は、印綬は漢王朝の正統観を明確に反映したものであったことを明らかにされている(5)。

すなわち、その印文に「委」とあるならば、それは「委」以外の何字でもなく、勝手に人偏をつけた「倭」字に解釈して受け止めてはならない、ということである。

確かに、上掲の馬援列伝にあったように、県レベルでは略字などが用いられたようで、封泥にも「葉蕪」を略したと思われる「来無丞印」というものがあつたりする(6)。しかし馬援がそうした状態がよくないと上奏してそれが認められたというのであるから、出土封泥で略字などが使われているものは、この馬援上奏が奏可されたときより以前の時代のものであるとすることができよう。「漢委奴国王」金印はこの奏可の後のものである。一方、例えば福岡市博物館所蔵の銅印「漢廬水佰長」では、非常に複雑な「廬」字も「广」を略した「盧」にしたりはしていないのである(7)。まして金印レベルの、しかも外夷に対して漢の権威が示されるものに刻する文字を省略するとは考えられないのではないだろうか。中国の封泥収集・研究の大家である羅福頤氏は、封泥の文字と『漢書』地理志や『続漢書』郡国志などにある地名の表記が違っている場合、封泥の文字に従うべきであることを論証されている(8)。劉弘氏もまた、文献に「犍為郡」とされているものは、封泥に「犍為郡」とあるものの間違いであると断じておられる(9)。

金印の5文字は「漢の委奴国王」と読まなければならないのであり、『後漢書』の「倭奴」の方が「委奴」の誤りであると、むしろ改めるべきであろう。おそらく、「倭国」のことも「奴国」のことも知っており、しかし金印に「漢委奴国王」とあることを知らない、范曄かあるいは後世の誰かが間違っただけであろう。

2. 金印賜与と北郊祀

このように金印を漢の礼制の中において考えてみると、さらに注目すべき重要な点が見えてくる。それは、光武帝紀中元二年条の記事についてである。

金印の問題を考える際、光武帝紀の「東夷倭奴国王遣使奉献」とあるこの記事を、単独の出来事として扱うのが一般で、現在流布している中華書局の標点本も、改行して「東夷」以下の文章を分けている。ところが、光武帝紀中元二年条は、

二年春正月辛未、初立北郊、祀后土。東夷倭奴国王遣使奉献。

となっていて、倭(委)奴国王の遣使奉献は、北郊祀が行われた時であったと記録されているのである。

漢の北郊祀については、別稿において論じるが、この光武帝中元2年のときの北郊祀は、外夷が帰服し祥瑞が現れたことにより、光武帝は天命を受けた漢王朝の中興者であることが示されたために行われたと考えられるのである。光武帝は並み居る群雄を制し、一代をかけて諸蛮を服属させ、その最晩年、死の直前に北郊祀を行った。そのような北郊祀が行われた時に、海を越えてはるか彼方から「倭奴」国王が来朝したということは、まさに光武帝が正統な受命の天子であることの証しに他ならなかったであろう。あるいは、前漢時代には漢王朝に服属し、しかし王莽時代に離反していた諸国が順次帰服し、その最後ついに、前漢王朝には歳時をもって献見してきていた倭から遣使が来たことが、北郊祀を行う動機であったかもしれない。

そのように見るならば、金印賜与に関するもう一つの重要史料である、東夷列伝倭の条、

建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀、使人自称大夫、倭国之極南界也、光武賜以印綬。

という記事についても再考する必要があると思われるのである。

この記事の、特に「倭国之極南界也」という部分は、従来よりさまざまに議論されている難解な文章で、たとえば魏志倭人伝に2カ所「奴国」が出てきてその2つ目の「奴国」が女王国の南境にあるということをもって、「(奴国は)倭国の極南界にある」と解釈されることが多いようである。またその場合、この文章を、魏志倭人伝を知っている范曄の付加した注釈文と捉える見方もされる。しかしそもそも、『三国志』の知識がある范曄や後世の者であるならば、倭には、女王国のさらに南にも国(狗奴国)があることは知っているわけであるから、女王国の内部に属する「奴国」を指して「倭国」の極南界にあるとは言わないであろう。あるいは「倭国」を「女王国」と解釈すればある程度理解はできるかもしれないが、「女王国」の名称は『後漢書』ではこの記事よりも後の時代のこととして登場しているので、文章の流れからすれば、その解釈は成り立ちにくい。また、東夷列伝の倭の部分の構成を見てみると、先学の指摘されるように、大部分が明らかに『魏志』からの引用によって書かれてはいるものの、建武中元2年と安帝永初元年の記事については、『魏志』には載せられていない記事であり、かつ具体的な年号が記されている。ここは、後漢時代の外交記録など「原資料」に拠った記述であったと考えるべきであろう。一方、「委奴国」人自身が、自分たちの国の位置が「倭国之極南界也」であると言うとは到底考えられない。後に述べるように、「委奴国」が後世のいずれの国であったかは不明ではあ

るが、それが北九州のいずれかであったことは、おそらく間違いないであろう。そうであるならば、その南に他国はあったであろうから、自分たちを倭の一番南の国であるとは言わないであろう。

ところが、「委奴国」への金印賜与が、皇帝の正統性を示すための北郊祀に関わって行われたことであるととらえるならば、新たな解釈が可能となってくるのである。すなわち、倭は中国の極南の地であるから、その国が帰属してきたことは光武帝が受命の天子であることを示す重要な証左であるので金印を賜与した、という解釈である。

后土を祀ることは、前漢武帝のときに始まり、3年、3年、2年、1年、4年という間隔で行われた。武帝期の最後に行われたのは、天漢元年3月のことであったが、注目されるのは、その前年、李広利が大宛を下して汗血馬を手に入れ、武帝はそれを喜んで「西極天馬之歌」という歌を作ったということである。この歌は、実は郊祀の際に奏される郊祀歌とされているのである。当時の漢の人々は、もちろん大宛のさらに西にも国々があることは知っていた。それにもかかわらずそこを「西極」とし、翌年、その歌が北郊祀で奏されたのである。この天漢元年の後土祀を最後に、武帝が死ぬまでの13年間、后土祀は行われぬ。それまでは数年おきに行っていたことからすると、西の「極」まで帰服させたことで、天下に皇帝の徳が及びついたので、后土は以後祀る必要がなくなった、ということであったと考えられるであろう。そうであるならば、「漢委奴国王」には、たんに遠方から来たので金印を授けた、のではなかった。まさに「南界」の「極」からやってきたからこそ、賜与されたのではなかっただろうか。竹内實氏は、金印の「漢」字の旁りが上と下とで切れていて、下が当時の他の「漢」字には見られない「火」字になっているのは、漢火徳説によるのではないかと述べられている(10)。火徳漢王朝にとって、火徳南方の極にまで皇帝の徳が及んだという事実は、きわめて重要なことであったに違いない。与えられた金印に「火」字が入れていることは、まさに火徳皇帝による天下支配を示したものにほかならず、「東夷」の国に対して「南界」を極めた所と言っていることも、それは地理的な意味ではなく、火徳に応じたことであったと考えることができるであろう。したがって東夷列伝の記事は、「倭国之極南界也」で止めて読むのではなく、「倭は国の極南界なれば、光武賜ふに印綬を以てす」と続けて読むべきであろう。

3 委奴国と志賀島出土について

では次に、なぜ金印が志賀島にあったのかということについて考えてみたい。この問題はここまでの論考とは違って、倭の側の事情によるものであろう。しかし筆者には、この問題もやはり、この漢の北郊后土祀と深く関わっているように思われるのである。

『漢書』地理志によれば、前漢時代、百余国に分かれていた倭の国々からは、歳時をもって漢に献見してきたとされている。言い換えれば、いくつもの倭の国が朝貢していたということである。これは前漢末頃の状況を記録したと考えられているが、そうであるならば、西暦57年の金印賜与から、100年も離れた昔のことではないことになる。複数国が遣使していた時からそれほど隔たっていない時期に、単独で遣使奉獻して金印を賜与されるということは、そのわずかの期間の内に、委奴国が他国を抑えるようになっていたからに違いないであろう。もちろん弥生期のこの時代、後世の大和政権のような組織をもって領土を支配するという形ではなかったであろう。しかし、規模は小さな国であっても他国を抑えて覇権を握ることは可能であり、それができる状態といえば、それはおそらくヴェネチアやイギリスのような、海洋国であろう。水野祐氏も「倭奴国」を航海通商の国と考えられた(11)。そうであるとするならば、委奴国は漢朝の信任を得て漢との貿易の窓口となり、他の倭の諸国を束ねていたと考えられるが、おそらく、他のクニを取りまとめるため、漢王朝の信任を示す威信財として金印を利用したことであろう。具体的には、なんらかの儀式、祭祀を通じてそれを示さなければならぬ。ならばその祭祀は、彼らが目の当たりにした漢「直伝」の北郊后土祀であったと考えることは妥当ではないだろうか。委奴国は漢に遣使して、結果として金印を得た。それは望外の出来事であったかもしれない。しかし留意すべきは、光武帝王朝にとって重要な政治的儀礼の大事な引き立て役であった委奴国は、儀式にも積極的に参加させられていたはずであるということである。そして当然、それがなぜ行われるのか、どのように行われるのか、またなにゆえに金印が賜与されるのかということなどの説明を受けたはずである。そうであるならば、弥生世界の彼らは、先進文明国漢で行われたこの国家的祭祀に多大な影響を受けたにちがいない。光武帝の北郊祀は、地を従えた時に行う祭祀であった。他国を束ねるための威信財を示すには、うってつけの祀りであるといえよう。

さて、その後土祠であるが、武帝の時には汾陰の脽上に立てた。『漢書』武帝紀元鼎4年の如淳注によると、

脽者、河之東岸特推掘、長四五里、広二里余、高十余丈。汾陰県治脽之上。后土祠在県西。汾在脽之北、西流與河合。

といい、黄河と汾水が合流するところに堀が掘られ丘状に盛り上がった地形にあったということである。『史記』封禪書と『漢書』郊祀志には有司が議して「后土宜於沢中圓丘為五壇」とすべしとし、武帝はそれに従ったともある。目黒杏子氏はこれをもとに円形の後土祀の形状を図示されている(12)。ただし『漢書』礼樂志によれば「沢中方丘也」とあって、円形であったのか方形であったのかわからなくなるが、武帝期は封禪書に従うべきであろう。郊祀志には、成帝の時のこととして、

祭地於大折、在北郊、就陰位也。

とあって、これに顔師古が注して

折、曲也。言方沢之形、四曲折也。

と言い、平帝の時に王莽が上奏したときに『別楽』というものを引用して

夏日至、於沢中之方丘奏樂八變。

と言っているので、武帝より後世には方丘になったようである。「天円地方」という宇宙観に対応したものに变化したということであろう。いずれにせよ、ここで問題としたいのは、北郊祠が「沢中の丘」にあったということである。光武帝もこれになったであろう。すると、志賀島は、まさに「沢中の丘」である。金印を賜与された国は、魏志倭人伝に登場する奴国や伊都国であったとする考えが多いが、奴国にせよ伊都国にせよ、これらはいずれも博多湾に臨む北部九州(福岡市、前原市)に比定されている。たとえ委奴国が後世のそのいずれの国ではなかったとしても、福岡県前原の遺跡群から出土した遺物から考えて、この地域が他の地域には見られないほど紀元前後に中国と密接な関係があったことは明らかで、また、金印出土地である志賀島と無縁の場所にあったとも考えにくく、委奴国がこの地域にあったことは間違いないであろう。そうであるならば、志賀島はその北方に位置する。志賀島では、漢で直接学んだ北郊后土祀が行われ、そこで漢から贈られた金印が示されたのではなかっただろうか。

ところがその体制も大きく揺らぐ。いわゆる倭の大乱である。この大乱は、後漢王朝の混乱と弱体化に関連があるとされているが、後漢王朝直伝の祭祀をもって諸国にその権威を示していた委奴国の力が凋落したのは当然であったであろう。その後女王卑弥呼が選ばれるのも、そうした後漢式祭祀に頼れないと考えるようになった諸国が、新しい祭祀を行う卑弥呼に期待したからではなかっただろうか。卑弥呼が操った「鬼道」は、列島土着のシャーマニズムであるとする考えが一般的のようであるが、当時中国で流行していた五斗米道などのことであるとする説もある。『三国志』韓伝などでは土着シャーマニズムを「鬼神」をまつと記すのに対し、ここで「鬼道」という表現を用いていることは注意すべきである。卑弥呼が倭 30 国の統合者であると認めながら「鬼道を能くし」しかもそれによって「衆を惑わす」という表現をしているのは、それが五斗米道などによって混乱に陥ったと考える中国王朝側の記録者によるものであるということを考えると理解できる表現であり、「鬼道」が五斗米道である可能性は高いと考える。すると、紀元前より歳時をもって来たり献見し、大陸の情勢に敏感であった倭の国々が、没落する後漢の祭祀に代わって、新しい天下を築かんとする勢いの太平洋道や五斗米道に新時代を託した、ということであったと考えられてくるのである。そして、その交代に伴って、役割を終えた金印は祭祀場であった志賀島に埋められることになったのではなかっただろうか。

おわりに

以上、「漢委奴国王」金印に関する諸問題を、漢の礼制という視点から考察してみた。その結果、礼制の秩序の中に組み込まれた蛮夷の国に与えられる金印であるがゆえに、「委」とある文字を「倭」と改変して考えてはならず、刻されているままに「委奴」国王と読まなければならない。そしてこの委奴国に金印が賜与されたのは、光武帝が正統なる天命の受命者たる漢皇帝であることを示す北郊后土祀を行おうとしたときに朝貢してきたためであり、そのことから『後漢書』東夷列伝の記事は「倭は国の極南界なれば、光武賜ふに印綬を以てす」と読むべきである。また志賀島から金印が出土したのは、その北郊祀において金印を賜与された委奴国王が、その北郊祀をまねて、倭の諸国に金印を威信財として示す際の祭祀としたため、北郊の「沢中の丘」である志賀島が、その祭祀場とされたからであろう、と結論した。このように、金印は漢皇帝の天下理念が表わされたものであったのである。

しかしながら、漢王朝の礼制は、ただ理念的なだけではなく、現実的状況を踏まえて礼的な形にしている。例えば軍事制度において「饗遣故衛士儀」という儀礼がおこなわれたが、これは民衆から上番させた衛士に対し、皇帝が正統な受命者であることを示す儀式であった。しかし一方で、これは、布衣の身から起こった劉邦が里の人々から支持を取り付けて皇帝にまでなったという事実をもとに作られた制度で、高祖後もしばらくはその実際の意味合いが強かったと思われることを、かつて筆者は論じた(13)。

この金印賜与も、受命天子としての正統性を表現した行為ではあったが、一方で、「委奴国」は金印を受けるに値する実態も持っていたのではなかったか。それは、「委奴」という名称が、北方の強勢力である「匈奴」と対になった呼称のように思えるからである。

日本史の立場からは、「委奴」はどう発音し、それは列島のどこにあったかが大きな問題として論じられている。ただ、中国史の立場からそれを断定することは難しい。指摘できることは、いずれの文字も、『後漢書』の他所で使われている場合と同じ発音であったであろう、ということである。「委」はおそらく「キ」であろう。やはり問題は「奴」の発音であろうが、当然「匈奴」の「奴」と同じ発音でなければならない。他に「高奴」「盧奴」などの地名もある。「匈奴」には、「フン」の音写であるという説もあり、それに従えば「奴」は「ヌ」であろうから、「委奴」は「キヌ」となる。しかし、そうした場合は、「匈奴」は通例のように「キョウド」ではなく「キョウヌ」と読み改め

る必要がある。あるいは「奴国」の場合の通説に従うならば「キナ」となり、「吉備キビ」や「阿波アハ」のように「稲」国という呼び名であったかもしれない。一方、一般的によまれているように「匈奴」を「キョウド」と発音するのであるならば、「委奴」は「キド」となる。そして、魏志倭人伝に登場する国名に対応させて、「キヌ」ならば後の「奴国」に、「キド」ならば「伊都国」になっていくと考えることができるかもしれない。前述のように、志賀島から金印が出土したことや考古資料などから考えて、その蓋然性はかなり高いと考えられる。とはいえ、例えば邪馬台国に次ぐ大国であった「投馬国」に対応する地名が現在わからなくなっていることを考えれば、後漢初期の金印賜与から卑弥呼の時代まで、倭の大乱を挟んで 200 年ほど経ているうちに「委奴国」は消滅していて、三国時代に記録された「伊都国」でも「奴国」でもなかったとしてもそれはありうることであろう。したがって、ここで考えるべきはそうしたことよりも、1 世紀の半ばにおいて、「委奴国」が単独で遣使して金印を受けたという事実が重要であるように思える。

つまり、当時東シナ海沿岸地域において海洋貿易といえば、黒潮を利用して朝鮮半島・楽浪郡や、あるいは長江河口域とも貿易をしていた倭人の海洋国である委奴国がしきっていたのではなかっただろうか。クニとしてはそう大きな人口を誇っていたわけではないが、北方平原を制する「匈奴」に対して、南方海原を制覇していた倭人の国を「委奴」と呼んだ可能性はあるのではないだろうか。

注

(1) 近年、鈴木勉氏が復元製作も試みつつ、製作技術が「広陵王璽」印が「漢委奴国王」印より一代新しく同じ工房で作られたとは考えにくいという意見を出され（「広陵王璽と官委奴国王印は兄弟印か」『青陵』第 106 号 福原考古学研究所、2000 年。「漢委奴国王印は光武帝が下賜した印か？—廣陵王璽との技術的距離を考える—」『書論』第 33 号、書論普遍集室、2003 年）、これを受ける形で三浦佑之氏は金印は亀井南冥が偽造したという説を提示された（三浦佑之『金印偽装事件 「漢委奴国王」のまぼろし』幻冬舎、2006 年）。しかし、後述するように、竹内實氏は、金印の「漢」字の旁りが上と下とで切れていて下が当時の他の「漢」字には見られない「火」字になっているのは、漢火徳説によるのではないかと述べられているが、流通している印譜などには見られないそのような特殊な字体は、偽造では作り得ないのではないだろうか。また三浦氏自身も述べられているように、偽作ならばなぜ「委」字を使用したかという重大な問題がなお残る。偽作ならば間違いなく『後漢書』に依って作られたであろうから、印文には「倭」字が使われたはずであろう。現段階では、諸氏が検討されているように、これは真印・公印であると考えて間違いはないと考える。

(2) 大谷光男『研究史金印』吉川弘文館 1974 年、pp. 70。また、福岡市で精力的に金印研究をされている岡本顕實氏の『謎とミステリーだらけ 志賀島の金印』（『郷土歴史シリーズ』Vol. 2、1994 年初版）にも同様にまとめられている。

(3) 久米雅雄氏は「それにしても金印を研究する大勢の人々が、同時代資料である金印の「委」字を軽視して、安易に後代の文献の「倭」字に同化しようと短絡に急ぐのはなぜであろうか。」と言われている（「「方寸の世界」に歴史をよむ—中国古印の考古学—」『古代九州の国際交流』九州歴史大学講座、1991 年。）ただし、『後漢書』の記述を改めるべきであるとまではされていないようである。

(4) 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢印璽の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館、1960 年、pp. 215。

(5) 阿部幸信「漢代における綬制と正統親綬の規格の理念的背景を中心に—」『福岡教育大学紀要』第 52 号第 2 分冊、2003 年。

(6) 関野雄「臨淄封泥考」東洋文庫和文紀要『東洋学報』第 72 巻第 1・2 号、1990 年、pp. 60。

(7) 福岡市博物館部門別展示『中国の古代印章 2—印章に映された古代社会—』2007 年 4 月 10 日～6 月 17 日出展印。なお、展示期間中に配布された解説リーフレット（297 番）には、「盧」とあり「广」がないが、大塚紀宜館員にお聞きしたところ、それは間違いであると確認していただいた。

(8) 羅福頤「封泥證史錄舉隅」『古文字研究』第 11 輯、中国古文字研究会・中華書局編輯部編、中華書局出版、1985 年。

(9) 劉弘「漢代西南諸郡太守封泥考略」『四川文物』1992-6、1992 年。

(10) 竹内實「金印の謎・文化の還流」『立命館国際研究』7 巻 1 号、立命館大学国際関係学会、1994 年。

(11) 水野祐「倭奴国考」日本古代文化叢書『日本古代の民族と国家』大和書房、1975 年。ただし、水野氏は、「漢委奴国王」を「漢倭奴国王」と読み、「ナ国」とであるとされている。

(12) 目黒杏子「前漢武帝期における郊祀体制の成立—甘泉泰畤の分析を中心に—」『史林』86 巻 6 号、2003 年、pp. 46。

(13) 志野敏夫「漢の衛士と「饗遺故衛士儀」」早稲田大学大学院『文学研究紀要』別冊第 11 集、哲学・史学編、1984、pp. 145～158。

Seal of gold “漢委奴国王” viewed from ritual system of Han

Toshio SHINO

Department of Socio-infomation

Faculty of Infomatics,

Okayama University of Science,

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005 Japan

(Received September 29, 2014; accepted November 6, 2014)

There are various problems that still have not yet been resolved for the gold seal 漢委奴国王 a national treasure. I discussed from ritual system of the Han Dynasty, them. As follows: the results. 1, "委" shape should not be instead of the character of "倭". 2, The gold seal is given in relation to the ritual to be performed at the northern suburbs. The reason for this ritual is to show that 光武 Guangwu Emperor is a legitimate emperor who received 天命 a Destiny Lofts. King of 委奴 came to see the emperor from Southern Territories of the world when this ritual was done. Seal of gold was given to the king for that. 3, The king of 委奴 who experienced this ritual of the northern suburbs. Therefore, the king was carried out a ritual to imitate the ritual at northern suburbs in order to bundle the countries of 倭. This ritual is performed at the hills in the water, so what the place was 志賀島 island.